2013 年 5 月 31 日・秋北新聞では

町長さんの全詩集　　小笠原みつ代

母の介護で、北秋田市増沢に滞在している。そこへ隣家の安部綱江さんが見舞いに立ち寄り、「こんど、町長さんの全詩集がでたのよ」と畠山義郎全詩集を貸してくれた。畠山氏は長年、合川町長を務めた方で、詩人町長として全国的に名高い方だ。今年 89 歳になる。母とは木戸石尋常小学校で同級生だった。「この分厚い 527 ページの中に、町長さんの一生が詰め込まれているのね」と、感慨深くページをめくっている。

母に、「町長さんって、子どものころはどんな子だったの」と聞いたら、「学校では勉強も運動も一番だったけど、とにかくキカン坊でね、道路へ座りこんでは悪たれをついていたものだったよ。よい家の坊っちゃんなのに、着物はいつもドロドロに汚れていた」という話。「あんなに美男子で背も高かったんだから、もしかすると好きだったんじゃないの」とからかったら、「ウンニャ、私が好きだったのは、町長さんよりももっと背の高いオダウンゾウさんだった」と否定。身の程知らずで、町長さん、ごめんなさい。

町長さんは 17 歳の時、『詩叢（しそう）』という名の詩の全国誌を主宰。今回はそれも復刻した。しかしその『詩叢』がもとで、特高から危険人物とみなされ、軍隊へ入っても最後まで最下位の兵隊として扱われ、手ひどい目に遭った。そんなことも、全詩集では告白している。

町長さんの詩には、黒い鴉（カラス）と赫い夕日がよく出てくる。なぜなのかと思っていたら、幼いころの体験が尾を引いているらしいことに、詩を読んでいて気がついた。例えば、308 ページに、「夕焼けの向こうの国へ行って見たら」の詩がある。よちよち歩きの僕が裸足のまま家の前に出たら、真っ赤な太陽が沈むところだった。びっくりして道路の真ん中に立っていたら、向かいの家の姉ボーが出て来て手足を洗ってくれた―。そんな内容の詩だ。ああ、それが赫い夕日の原点なのかと、納得したのだった。

その詩の中には、ヘルパーさんとのやり取りも出てくる。私も東京で、12 年間ヘルパーをしていた。現在はヘルパーネット「あおぞら」の代表をして機関紙を発行している。ぜひこの詩を持ち帰り、転載させてほしいと思っている。

また 230 ページのエッセー 4「鴉に反哺（はんぽ）の孝あり」のことわざの説明も勉強になった。子鴉が幼いころ、口移しでエサをもらったように、老後の親に口移しで食物を与える報恩感謝の行為が、「鴉の反哺の孝」のいわれの由。初めて知ることわざであった。母の介護をしている今の私にぴったりの話で、心に迫るものがあった。

町長さんの詩は抽象的で難しいと言う人もいる。反面、359 ページの「まさひでもあぐら」のように、とても分かりやすいものもある。2009 年以降の「無限のひとり旅」に収録された作品は、日ごろ、詩に親しんでいない人にも理解できるのではないかと思う。

「まさひでもあぐら」は、幼い息子さんとの対話集である。いま 1 歳半の孫と同居している私にとっては、とても参考になる詩であった。子どものカタコトの中には、ポエム（詩）が含まれていることを改めて知らされ、帰京したら孫の言葉をぜひ採集しなければと思ったのだった。

また、私が卒業した合川北小学校（旧下大野小学校）の校歌は、町長さんが作詞したものである。今でも同級会の初めには、みんなで「起伏する出羽の山脈…」と、必ず合唱する。

ふるさとに、詩人の町長さんがいてくれて本当によかった。ぜひこの畠山義郎全詩集を数冊図書館に備え、市民の皆さんに読んでいただきたいものだと思わされている。

と紹介されています。